

茶の湯文化学会会報 No.80

第80号 / 2014年3月31日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

千家の礎を築いた少庵 降矢 哲男

はじめに

昨年の九月七日、慶長十九年（一六一四）に没した千家二代少庵の四百年忌を迎えた。そこで、少庵を偲びその茶風を探ることを目的として、九月三日から十月六日まで、茶道資料館では特別展「少庵四百年忌記念「千少庵」展を開催し、十月十九日から十二月十五日まで、表千家北山会館では特別展「少庵四百年忌千家二代 少庵ゆかりの茶道具展―利休の継承とその時代―」展を連携展示として開催し、図録等の発行を行った。

両展覧会を通して、少庵所縁の茶道具を展示し、その茶風や人柄をみるとともに、展覧会開催を通じて見えてきた少庵の趣向や交遊、時代的な背景などについて振り返ってみたい。

少庵の動向とその時代性

少庵は義兄の道安（一五四六―一六〇七）と同じ年の天文十五年（一五四六）に生まれ、慶長十九年に六十九歳で没する。少庵の名が散見されてくるのは、利休の娘である喜室宗桂と結婚し、茶会に招かれるようになりはじめ、堺から京都の大徳寺門前の屋敷へ

移っていく天正六、七年頃からである。その十年ほど後に利休の死によって、少庵、道安ともに各地に預けられるが、その後、道安は堺へと戻り家業を受け継ぎ、少庵は京都へ戻り千家再興を成し、宗旦へと利休の精神を伝えるといった大役を果たすこととなる。

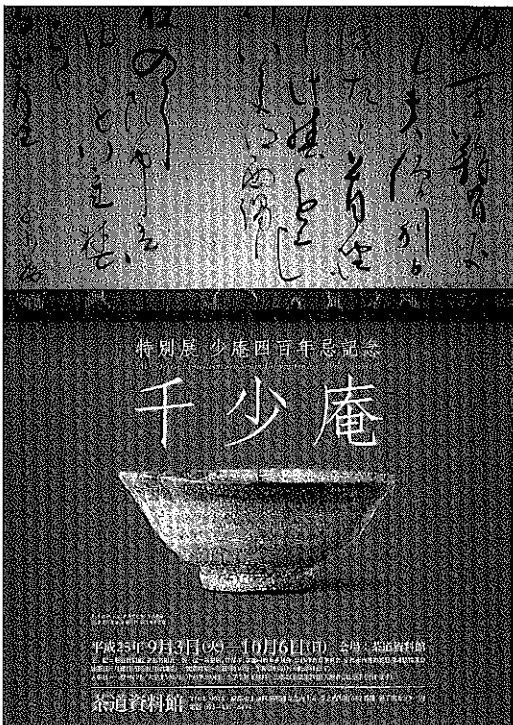
『利休由緒書』によれば、「利休御成敗已後、嫡子道庵ハ立除、金森中務法印ヲ頼、かくれ罷有候、二男少庵ハ蒲生氏郷へ御あすけ、奥州へ流罪ニて候、」とあるように、利休の二人の息子のうち、道安は飛騨高山の金森長近を頼って身を潜め、少庵は会津若松の蒲生氏郷のもとへ預けられたとされる。

少庵の身を預かった氏郷は利休七哲の一人にも数えられる、利休流の茶法に通じ、会津における少庵の活動を後押ししたとされる。その後、利休の死から三年後の文祿三年（一五九四）に氏郷は徳川家康と共に豊臣秀吉へのとりなしに尽力、その甲斐あって少庵の赦免を得て、会津にいる少庵に家康との連名で出された「少庵召出状」（不審菴蔵）により、京へ戻ることができたのである。

帰洛した少庵は、権力と一定の距離を保ってわび茶人に徹し、利休の茶の湯を忠実に継承していく。それ



「千家二代少庵ゆかりの茶道具展—利休の継承とその時代—」
展リーフレット



「千少庵」展リーフレット

はまた、子の千宗旦（一五七八—一六五八）へと受け継がれ、現在に続く千家茶道の礎となった。

ただし、少庵の出自をはじめ、生涯の様子について分かるような資料は多くは残っていない。そのため、どうして、家康や氏郷などの名だたる大名が秀吉からの赦免をとりつけてその後も庇護されていたのか、また、豊臣政権から徳川政権へと変貌していく時代をどのようにして乗り越えたのかなどについては、不明な点が多いのが実情である。

少庵の茶道具

少庵が所持したとされる茶道具のなかには、利休から伝えられたものや関係のある道具が多くみられる。「松屋会記」の中に少庵の茶会記録がいくつかあり、利休所持の姥口の霰釜や面桶、利休とも関係の深い大徳寺

の古溪宗陳、春屋宗園、雲英宗偉などの墨蹟を用いているのがわかる。また、『千利休由緒書』には次の記述があり、「其後御赦免ニテ帰洛仕候、秀吉公仰にハ、利休かたへ、節々御成被成候時、十歳斗の喝食宮仕いたし候、是ハ子孫かと御たつね、石田三成申上候ハ、少庵世倅ニテ利休孫ニテ御座候ト申上ル、利休欠所ノ中、よき道具ヲ三棹、彼子ニくれ候へト上意ニテ被下候、此喝食ハ後ニハ宗旦ト申候」、少庵が秀吉の許しを得て帰洛し、秀吉が利休の孫の宗旦へ長櫃三棹分の利休道具を渡したことが書かれている。この時に宗旦の年齢は一六、七歳で、少庵が後見の立場として、渡された道具を扱っていたことは想像される。

さて、少庵所縁の茶道具についてである。

少庵自作のものは竹茶杓や竹花入で、竹花入は一重切花入や竹二重切花入などがあり、竹輪無二重切花入（静嘉堂文庫美術館蔵）は、上部を切り落として下部に窓を開けた形のものである。一方、少庵所持が明確なものは特に限られ、茶碗では長次郎作の黒染茶碗銘「大黒」（重要文化財、個人蔵）、青井戸茶碗（少庵井戸、MITHOMUSEUM蔵）、人形手茶碗など数点が挙げられる程度である。

少庵の好みの茶道具としては、代表的なものとして夜桜棗が挙げられよう。黒塗の大棗の甲から胴にかけて桜の花が黒漆で描かれ、その上にさらに黒漆をかけるもので、一見すると無地のように見えるが、透かしてみると桜の文様が浮き出て見え、夜桜の風情を見事に表現している。釜については田口釜銘桜川（個人蔵）や兎耳の鑲付が特徴的な雲龍釜、胴部に鑲留がなされた四方釜、そして、鉄蓋の摘みの廻りに六つの三つ巴の地紋が配され、釜肌が霰地紋になった巴霰釜が挙げられよう。

また、年忌において好まれた茶道具も注目される。その一例として、少庵二百五十年忌には裏千家十一代玄々斎が少庵所持とされる三鳥角水指、独楽香合、茶杓の写しを作っており、本歌の存在が不明な中、少庵所持の茶道具やその好み、そして写しが作られた時点での少庵に対する印象などを探る上でも、重要なものとなっている。

少庵とその交遊

少庵というと、関係する資料が限られていることもあり、宗旦に全てを譲って早くに隠居していた印象を持たれていた。しかしながら、

ら、利休の年忌に大徳寺の雲英宗偉や玉甫紹琮を招いた消息（今日庵蔵）や、文禄四年（一五九五）の帰洛直後に仙嶽宗洞に利休道号の意を尋ね、それに対し仙岳が偈頌を認めて少庵へと書き送ったもの（今日庵蔵）があるなど、大徳寺の僧侶との活発な交流がうかがえる。また、宇治の茶師・上林味下斎に宛てた消息（今日庵蔵）では、織田有楽から上林への茶の御用の仲介を少庵が行っていることが分かる。有楽が道安に宛てた消息（茶道資料館蔵）には、少庵とともに有楽の下へ来るようにとある。この他にも公家の観修寺晴豊や烏丸光宣、武家の木下延俊や小堀遠州、伊達正宗の茶匠の清水道閑などもやり取りがみられ、利休以来の親交がある人々とともに、西陣の御寮織物師の井関七郎右衛門（妙持）や絵師の俵屋宗達などといった京の町衆とも積極的に交流を持っていたなど、多岐に渡る交流と少庵の精力的な動向がみえてくる。

こういった状況から、宗旦へ家督を譲って早くに隠居したといった様子は感じられない。むしろ幅広く交際を広げながら、利休の茶湯を伝える努力をしながら生涯を過ごしたといってもよいのではないだろうか。そして、

特定の人物に仕えることなく、こうした人のつながりを活かしながら、茶の湯を糧としていたのであろう。

おわりに

少庵が用いた茶道具の多くは利休から伝わったものが大半であり、好み物は利休形を手本としてそこに工夫を加えて作り出された物が多い。そうした点から、少庵が利休の茶の在り方を忠実に継承し、それを宗旦へ伝えることに重きを置いたことが想像される。

また、大名へ出仕をせず、様々な方面に渡って交友を深め、京都を拠点に激動の時代を生きたことは、少庵の優れたバランス感覚があったからこそであり、そのことが今日まで続く千家の礎を作りだしたといえよう。

理
事
会

平成二十五年第三回理事会が、十二月七日（土）午後二時より同志社大学徳照館一階会議室に於いて行われた。理事二十名に加え、大会担当である幹事五名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、平成二十六年年度総会・大会について
- 三、会誌について
- 四、その他

第一号議題では、各地例会の経過報告が行われた。

第二号議題では、二〇一四年が高山右近と古田織部の没後四〇〇年忌にあたることを受け、大会シンポジウムのテーマは古田織部を中心とし、高山右近も含め利休七哲の時代を総括するような内容にすることが前回に引き続き熊倉会長から提案され、これを受けた田中副会長の素案をもとに、原田理事・山田理事と大会担当幹事の計七名を実行委員とし、内容を詰めていくことで承認された。見学会については、中村副会長が担当することになった。

第三号議題では、美濃部理事から会誌二十一号の掲載内容についての報告がなされた。また、前回理事会からの懸案である会誌の年二回発行に向け、同日午前中に実施された編集会議の内容についても報告があり、シンポジウムや講演に出演依頼をする際には、同時に原稿執筆も依頼することや、大会や例会での研究発表が、論文へとつながるよう働

きかけるなど、各運営と積極的に連携し、投稿論文へとつながる道筋をつくるようにすることや、会誌のバックナンバーのネット公開についても今後検討していくことになった。

また、会誌と会報の住み分けについても今後議論が必要ではあるが、当面は、会誌が年二回発行になった場合も、現在の年四回発行ペースを継続することとなった。

第四号議題では、少庵四〇〇年忌を受け、いずれかの例会に於いて少庵のシンポジウムを開催できないかと熊倉会長から提案があり、近畿例会に於いて次年度五月に実施することが決まった。

例 会

東京例会

(平成二十五年十一月十六日)

「永青文庫資料から見える細川三斎」

三宅 秀和

近世大名細川家の基礎を作った人物であり、千利休の弟子で、桃山から江戸時代前期の茶人である細川三斎(忠興、一五六三～一六四五)を、細川家に伝来した文化財を有

す永青文庫の資料によって、いかなる性格の人物かを窺った。

三斎は長命のため利休を語る唯一の存在となったといわれる。確かに三斎は書状で利休を話題とするが、明智光秀がしていた書状を送る作法や、信長の時代には戦功の穿鑿はなかったことなども述べており、三斎が利休を語るのには、長命の証言者が往昔を語り伝えたいという思いがある。

続いて三斎が道具類を見立て、細工した様子を見たが、家光から拝領した掛物の表具を改めたり、幕府旗本らの茶湯道具の蓋や袋も作らせる一方で、合戦で用いる具足を工夫したりするなど、武器にも工夫や指導を加えた。三斎は、忠利宛の寛永十一年六月二十六日付三斎書状に白茶の色や味をうつくしいと述べた後に続けて、試し斬りをしたい刀があれば、捕らえた「馬取共」を送ると記すように、江戸時代に入ってもなお血を厭うことのない戦国期の武将であることと、茶人であることが一体の存在であった。

最後に新しい動向への態度を見れば、雪舟画を複数所持して將軍に献上したり、狩野家の絵師に見せたりなどして、新たな動きにも一脈通じている。三斎は古いものを基盤に故

事を語り伝える存在でありながら、新しい好み形成される動きにも参加していたといえるようである。

(平成二十六年一月二十五日)

「江戸時代初期における茶陶の在り方について―光悦を中心に―」

砂澤 祐子

昨秋、五島美術館で開催した「特別展 光悦―桃山の古典(クラシック)」で展示した本阿弥光悦(一五五八～一六三七)作の茶碗を観察し、江戸時代初期の茶陶の在り方を通して、光悦作茶碗の特徴について述べる。

光悦の陶芸については、元和元年(一六一五)に徳川家康から鷹ヶ峯の地を拝領した後、樂家の協力を得て作陶したとされる。その茶碗は、すべて手捏ねによる成形である。種類は、白楽、黒楽、赤楽(赤土に透明釉を掛けたもの・白土に黄土を塗ったもの)、飴釉の楽焼のほか、膳所焼の窯で焼いたとされるものが伝わる。形状は、半筒形の「角作り」、杵形、「時雨」(名古屋市博物館)などのタイプ、「乙御前」(個人)のような内部にめり込むような高台を持つタイプなどに大別できる。

杵形は、従来織部焼の影響が指摘されてきたが、最近の京都市内の発掘状況から、織部焼の流行が古田織部没後の元和年間以降との見解が提示され、光悦作の茶碗についても織部との関連性に疑問が生じる。

十六世紀末から十七世紀初頭にかけて、青磁(無地無文の総釉掛けの磁器)と底部に土見せがある天目(土のもの)という規範から脱却した、磁器を指した絵のある陶器や土見せのある茶碗が出現した。樂家でも慶長年間に流行した美濃焼(志野焼)の影響を受け、土見せのある茶碗や杵形の茶碗も制作したが、光悦茶碗の中には、土見せのあるものは白楽の「白狐」(藤田美術館)と「膳所光悦」(MOA美術館)のみで、杵形の茶碗も高台内まで施釉され、唐物の青磁茶碗を基準とする「茶碗」における規範「総釉掛け」を守ったものが多い。造形の斬新さとは相反し、光悦の茶碗は、古い概念を包括していると指摘できるのではないだろうか。

「名物記と絵画 梁楷画の受容をめぐる」

鈴木 しおり

梁楷は中国・南宋時代、十三世紀初頭に活躍した画院の画家である。元時代、夏文彦が

編纂した『図繪宝鑑』(自序一三六五)には、寧宗時代、嘉泰年間(二〇一～二〇四)に画院の待詔となり、人物画、山水画、道釈画、鬼神画を得意としたと記す。梁楷の伝記はこの『図繪宝鑑』が唯一といってもよい文献で、日本でも度々引用されている。例えば、室町時代、十六世紀初頭に成立した『君台觀左右帳記』では、写本によって多少の違いはあるものの、梁楷を南宋時代の、人物画を得意とした画家であるという点で一致している。

ここで、日本の名物記や茶会記に目を向けると、一つの興味深い事実がある。それは、桃山時代の茶会記、具体的には「天王寺屋会記」のみ、梁楷の花鳥図が登場するという点である。本発表では「清玩名物記」、「唐物凡数」、「天王寺屋会記」、「玩具名物記」、「古今名物類聚」、「雲州蔵帳」、「茶器名物図彙」を参照したが、画題が不明の作品もあるものの、花鳥図を見出せるのは「天王寺屋会記」のみだった。桃山時代の画家・長谷川等伯が語った内容の聞き書きである「等伯画説」にも、梁楷の「鷲の絵」を見た堺の茶人・水落宗恵が「しつかなる絵にて御座有」とプラスの評価を与えたことを挙げている。しかし、『図繪宝鑑』には梁楷の得意画題の中に花鳥

図は挙がっていない。つまり、茶人たちは画史の記述には頼らずに独自の水墨画観で花鳥図を選んだといえる。

東海例会

(平成二十五年十一月十六日)

「少庵の妻女について」

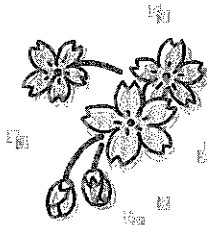
山田 哲也

千少庵の妻が利休の娘ではないという説は、中村修也氏が提出され、熊倉功夫氏が支持された。中村説の根拠は、いままで挙げられてきた少庵の妻＝利休の娘という史料が、曖昧なものばかりで、決定的なものがない。むしろ少庵の妻が利休の娘ならば、このような曖昧な史料しか残らないというのは有り得ないという史料検討の結果からであった。また熊倉氏も随流齋宗左の自筆覚書にある文言を引用し、これを補強された。

これについて報告者は、かつて杉本捷雄氏を取り上げられた堀内家蔵の利休画像に着目し、以下その外題、添え状も合わせて考察し、この画像は利休の娘がその十三回忌にあたって春屋宗園に着讃を依頼したもので、それを息子の宗且から、さらに宗且の四男仙叟に継承されたものであることを再確認した。ただ

し、杉本氏が利休の娘を「亀」とするのは、現在の研究状況からは無理があるとして、村井康彦氏が提示された「おちやう」という女性性の再検討を行った。

東京の畠山記念館が所蔵する利休書状は、京都紫野の少庵から利休のもとへきた金子のうちの一枚を「おちやう」という女性に与えるというきわめて簡潔な内容のもので、しかも古筆研究家の小松茂美氏が「利休の最も確かな筆跡の基準となる」と高く評価されている。この書状には、江戸初期の茶人家原自仙が仙叟に宛てた勸返状が添えられており、そこに仙叟が「おちやう」を少庵妻女の喜室宗桂だとしているのである。表千家に残る一級史料には、喜室宗桂（慶）は少庵妻女とされている。また利休が宛名の女性の名前を直接書いていることから、当時としては異例である。普通は、少庵「内」、「内室」という表現に止まる。それからしても、この女性が利休の娘である可能性が高い。やはり少庵妻女は利休の娘であろう。



ことにより座敷飾りとしての絵画の需要が増えていった。そのような時期に狩野派絵師の作品や雪舟の作品が求められたとしても何の不思議もない。そのため、かなりの贋物もまわっていたのである。しかし、茶席に用いられることは少なかったように見える。

島、岡山、飾磨等を巡って、門人との交流や入門者の獲得に励んだのだった。幕末における家元の downward は、旧山陽道を通らず、大多数は船を利用した。寄港した港町では、有力な塩田地主や廻船問屋等の商人を集めて、それぞれの流派を支持し、門人誓約を交わした。小規模な港町なら、文化サークルを一つの流派で固めた場合もある。明治に入って都市に鉄道が開通すると、家元も、これを利用して幾度も山陽道を下向したが、小規模な港町は、経済が衰退すると、おのずと茶を嗜む者も減るほかはなかった。

「茶湯と雪舟作品」

影山 純夫

茶会記など茶の湯の資料についてはまだ十分に探索や紹介がされておらず、この不十分な資料によって結論を出すのは極めて危険であるが、今のところ次のように言えよう。

雪舟作品に対する評価は、元和頃には大いに高まり需要もかなりのものになっていた。江戸の『墨跡之写』には元和に持ち込まれた雪舟作品が一〇点にのぼるのもその現れであろう。元和偃武といわれるように社会が落ち着き始め、大名達も城郭・御殿の整備を行う

近畿例会

(平成二十五年十二月十四日)

「近世後期の茶道家元の downward」

—山陽道を中心に—

井上 秀二

茶道の家元は、地方の招きにに応じて下向した。ここでは、山陽道を中心に点と線を結んで、藪内流茶道・速水流茶道の場合を紹介してみた。

瀬戸内は海路が発達し、幕末には、文政二年七月から毎月一日と六の日に、尾道から大坂まで定期船が出ていた。藪内流の八代真々斎竹崎の嫡男であった竹風も、これを利用して、安政六年、播州赤穂、倉敷玉島、尾道、広島を経て、岩国の官島に詣でている。旅は各地の有力な門人を訪ねながらのもので、たとえば、播州赤穂では塩田地主の柴原家に半月以上も滞在し、剣仲忌・茶会・稽古の指導もした。廻船問屋の倉敷玉島の萱谷家と尾道の橋本家に滞留の後、広島へ向かった。

速水流三代宗寛も、嘉永元年の郡上八幡への downward から文久三年まで、毎年のように地方(近江八幡・大坂・姫路・岡山・尾道等)を訪れ、入門者を書き留めた「姓名録」も残している。船で尾道に直行し、福山、笠岡、児

く、使われ方が変わっていったのであって、客をもてなす座敷などにおいては雪舟作品がその家の宝として大いに活用されていたはずである。



東京例会

四月十九日(土) 午後二時

(会場：未定 決まり次第、学会ホームページでお知らせします。)

「高麗茶碗と粉青沙器(飯)」 吉良 文男

「十八世紀末の江戸居住の大名の文化交流

圈(飯)」 谷村 玲子

五月二十四日(土) 午後二時

(会場：五島美術館)

「四頭茶礼にみる寺院料理(飯)」

石井智恵美

「北野大茶湯再考―天正十五年の茶の湯―」

中村 修也

七月十九日(土) 午後二時

(会場：東洋英和女子学院)

「新出名物裂 鴻池家伝来「裂筆筒」(飯)」

佐藤 留実

4F会議室

「今泉雄作の日記と正木直彦の茶会記について」
依田 徹

「金沢の数寄者 山川家三代」 高嶋 清栄
「岡倉天心・茶の本」 佐々木美帆

六月一日(日) 午前九時三十分～午後三時

(会場：金沢市江戸村旧山川家住宅)

旧山川家住宅茶室「通楽庵」見学会

(案内) 細野美希

東海例会

四月二十六日(土) 午後二時

(会場：名古屋文化短期大学)

「茶臼とその歴史」 桐山 秀穂

六月二十一日(土) 午後二時

(会場：名古屋文化短期大学)

「数寄屋御成と猿面茶屋」 中村 利則

高知例会

六月二十九日(日) 午前十時

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)

五月六日(火) 午後二時

(会場：同志社大学今出川キャンパス※)

シンポジウム テーマ「千少庵」

原田茂弘・山田哲也

コーディネーター・熊倉功夫

※使用教室は決まり次第、学会ホームページ

シにてご案内いたします。また、例会当日

には西門に会場案内を掲示いたします。

「茶の湯文化学会二十六年度大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」永吉溪滋
軽食茶事(十二時～十六時)
席主 四名
会費 五百円
※参加希望者は予め連絡をして下さい。



平成二十六年年度総会・大会のご案内

平成二十六年年度総会・大会は、京都に於い

て左記の日程で現在計画中です。詳細は四月中旬以降、別途ご案内致します。

六月十四日(土) 見学会

十五日(日) 総会・大会・懇親会

新刊紹介

*『大口樵翁―女性茶の湯のすすめ』熊倉功夫編著 宮帯出版社 定価一、八〇〇円(税別) 江戸時代中期、石州流大口派を開いた樵翁は『刀自袂』を著し、初めて女性に茶の湯を勧めた。また、井伊直弼の茶の湯に大きな影響を与えた。

*『エピソードで綴る 戦国武将 茶の湯物語』矢部良明著 宮帯出版社 定価二、七〇〇円(税別) 利休の茶の湯に対して、武将の側からその推移発展を見る。

*『わかりやすい高麗茶碗のはなし』谷晃著 淡交社 定価一、八九〇円(税込) 複雑な高麗茶碗の分類を「井戸」「蕎麦」など二十一に整理して、特徴や見所を紹介する。